

祝卒業

スクバの青春



校長 村上 英治

「3年間毎日遠い藤枝までありがとうございました」

卒業式を終えた後、藤枝便のスクールバスの前に立っていた運転手さんにその女生徒はそう話しかけ頭を下げた。突然のことで驚いたのか、その運転手さんは慌てて、「いや、どうも」と言葉を返した。

私はその光景を偶然見かけた。行動や言葉にはその人の心根が現れる。心動かされ少し目頭が熱くなった。

彼女はいつも放課後、スクールバスの待ち時間2階のフリースペースで勉強していた。学校生活が充実していること、友達とおしゃべりするのが楽しいこと、諸事情で県内の大学に進学したいこと、短時間ではあるが彼女の学校生活や将来の希望の一部を聞き取ることができた。笑顔というのは人を安心させる。彼女はいつも笑顔だった。

スクールバスを利用している生徒は、異口同音にこう言う。

「こんなに楽で快適で素晴らしいものはありません」

雨の日も風の日も指定されたバス停で待ってさえいれば、スクールバスはやってきて学校まで安全に連れて行ってくれる。帰りも然りだ。乗り換える面倒や煩わしさはない。そんなスクールバスに3年間お世話になった生徒たちはこう嘆く。

「もうスクールバスに私は乗れないんですね」「隣の海洋学部に進学するんです。乗せてください」「きっと走っているスクバを見たら悲しくなってしまうだろうなあ。スクバに乗れる高校生が羨ましい」「今日でスクバは最後、あ～私の高校時代、青春が終わった!」

翔洋の生徒達にとってスクールバスは青春、高校生活そのものだったのだろう。生徒たちのスクールバスの短縮形スクバは、1000日の高校生活とともにあった。中部部出身者なら2000日である。喜びも悲しみも、嬉しいことも、つらいことも共に分かち合う仲間、友だったのかもしれない。

卒業式にお礼のあいさつをした女生徒は県内の大学に合格し進学した。藤枝から草薙の高台にある校舎に通っている。きっとどこかでスクバを見かけていることだろう。

懐かしい思い出がよみがえってくるのか、それとも、「また、スクバに乗せてほしいんだよね」と笑顔で友達に話しかけているのか。

聞いてみたい気がする。

学年主任よりメッセージ



3 学年主任 皆川 勇太

3年生の皆さん、保護者の皆様、ご卒業おめでとうございます。

この学年は、2019年度の感染予防のための『休校』から始まり、研修旅行の『延期』、『行き先変更』そして、いつもなら楽しい昼休みも『前を向いて黙食』、緊急事態宣言下での『オンライン授業』など誰も経験したことがない状況ばかりの高校生活でした。私自身も様々な判断が難しい中、学年団の先生方に支えられ、制限の中でもひとつひとつの行事を最大限に楽しむみなさんの姿を見ることができてとても幸せでした。

卒業生が立ち向かう社会は、激動の状況にあると思います。これから状況が良くなるのかもわかりません。常に「誰にも正解がわからない問題」をつきつけられる社会です。この問題を解くために必要なのは、判断力、対応力、人間性であると思います。この2年間、「多くの制限がある中での高校生活」を乗り越えたという経験を活かすことができるのは、まさにこれからだと思います。「制限の中でも最大限の楽しみを見つける力」を持ったみなさんなら必ず乗り越えてくれると信じています。

卒業生386名がこの先、周りの人たちから「支えてもらえる人」、「大切にされる人」であり、「幸せな人生」を送っていくことを心から願っています。

